自然保護ということの意味と問題点

井手貢夫

「自然保護」ということの重要性がしだいに認識されてきつつあることは大変喜ばしいことであるが、しかし自然保護とはそ

もそも何かということになると、人によってその考え方、ないし理解の仕方についてはいろいろと相違があるようである。

わかりきったことであるが「自然保護」は根本において人間のための自然保護である。人間の福祉と健康とを増進するために自然保護が必要なのである。しかし、またこの点でさまざまに意見がわかれ、解釈がちがってくることが予想される。しかし根本的にはつぎのように考えられると思う。

第一に自然を保護する上に、学問的な立場ともっと広い一般的な景観的な意味での自然保護とをわけることができよう。もちろん、しかしこの二つはじっさいには相互にかさなりあうもので、まったくはっきりと分けがたい面も多く生ずるのである。

第二には、その立場の相違からも当然生じてくることであるが、自然を保護するその仕方が二つに分かれ得る。そのひとつは自然をできるかぎり自然そのものにゆだねておいて、人工的な干渉をまったく加えない、というやり方である。他の方法はできるだけ自然らしさを保つ、あるいは、いわゆる自然美を保つように、またわれわれが保存したい、あるいは維持したい方向にそって自然を保つように人工的な工夫や努力を加えて、そういう自然を保護するというやり方である。

これまで述べてきたことは、自然保護という立場においてのみ考えたのであるが、はじめに書いたように、自然保護とは必竟人間の福祉と健康とのためであるから、そのように保護された自然をどのように利用するかという問題が、観光の問題をもふくめて当然おこってくる。

しかし利用という面は、いくつかの点で自然保護と対立する面が生じ易い。もともと人間の福祉と健康増進のための自然保護であるから、保護された自然はなんらかの形で当然利用されねばならないのであるがもしその利用が保護されている自然を破壊することになると、そのことによって、かえって現在および将来の人間のために損害を招くことにもなる。そこで、当然自然保護と同時にこれの利用施設、ないしは利用方法ということが問題になってくるのである。

そして最後に、しかもこれが現在われわれが当面しているもっとも困難な問題のひとつであるが、こうした自然を利用する側の態度である。これは一口にいってしまえば、社会道義の問題である。

このほかに自然保護区域と経済産業開発（観光もここにふくめて）との調整の問題も、純粋の意味での自然保護区域の利用とは別のものとして考慮されねばならない。この点の調節がまた自然保護の上でもっとも重要な、かつ困難な問題をふくむものである。

大体自然保護ということのもつ意味と問題とは以上のとおりと思うが、これらの点については考うべきこと、補足説明すべきことが非常に多いのであるが、ここでは自然対人間ということについてだけすこし述べておきたい。

まず自然を自然のままにゆだねて、いっさいの人工を加えない、ということであるが、これは厳密な意味においては、こんにちでは不可能といわなければならない。もっともこういうのは一応人間を自然に対立するものとして考えているのであって、広い意味からいえば、人間そのものも大自然の中のひとつの生物にすぎないので、そういう考え方からすれば人間のいっさいの行為も、大自然の中のこの地球という微小な球体の上に生活する一生物の行動にすぎない。その意味ではこれも自然のなりゆきというべきであろう。ただ、私たち人間と他の地球上の生物とを比較したばあいに、人間のほうがはるかに大きな計画性と影響性とをもっていると思われるので、私たちとしては自然に対立するものとしての人間を考えることが一応便利であるというにすぎないのである。

そこでそういう人工的影響からできるだけ自然を守っておいて、人間に対立するものとしての自然を、できるだけそのままの状態に残しておこうということは、種々の学問上の立場からも、また、いわゆる文明化されない原始的自然への人間の憧れという意味からも、意味も深く、興味ももたれるところである。

そしてじっさいに、たとえばスイスのエンガディンの自然保護公園はそういう目的で放置されているわけである。しかし私が最初に厳密な意味での自然放置は不可能といったのは、今日世界中（理念的にもっとも厳密ないい方をすれば宇宙中といっていいだろう）なんらかの形で人間の影響がおよばないところはないからで、しかもその影響は日増しに強くなって行くのである。

そういう意味ではどんな原始的な自然でもすこしずつ人間的影響による変化をうけつつある。従って原始的自然というものもいつもこれは比較的ということにもなるのである。しかし、だからといって原始的自然を無視してよいということではなく、それゆえにこそこの原始的自然をそれなりにできるだけ保持し、私たちの直接の影響下にある自然との比較ということが、非常に多くの意味をもつことはさきにも述べたとおりである。

（北大・文学部教授）